

PANews

Vol. 21, No. 4, Jul. 2011

もくじ

▽大会終了報告	1
▽大会のお知らせ	2
▽学会各賞受賞者の言葉	3
▽授賞報告	4
▽研究部会レポート	5
▽ from Editors	6

【大会終了報告】

日本生理人類学会第 64 回大会開催報告

大会長 栢原 裕

九州大学大学院芸術工学研究院

2011 年 6 月 11 日(土)と 12 日(日)の両日に、九州大学大橋キャンパスにおいて日本生理人類学会第 64 回大会を開催いたしました。一般口演 29 題、ポスター 30 題の発表が行われ、大雨のなか口演者を含め 195 名の参加をいただきました。また、多くの企業から、展示や広告で賛助をいただき、ここに改めて御礼を申し上げます。

大会初日には、温熱生理学の世界的権威である、Wollongong 大学の Taylor 教授による特別講演 Human heat adaptation: an evaluation of the historical and contemporary evidence for ethnic differences が行われました。同教授は各種の会合や交流会にも参加していただき、特に、若手研究者や学生にと

って良い刺激になったと思われます。さらには、シンポジウム「環境及び遺伝の要因と生理的多型性との関係性」を 3 名の先生方を招き開催いたしました。本シンポジウムには人類学会関係者の参加も受け入れました。

実験施設「環境適応研究実験施設」と「居住空間実験住宅」を会員に開放した後、懇親会を、生協食堂で行いました。食堂は古く狭いので心配しましたが、当初の計画よりも多い 137 名の参加を得て、会員間の交流が深まりました。懇親会では、前回大会の発表奨励賞の授賞式が行われ、65 回大会は、11 月 26 日、27 日に小谷大会長のもと関西大学にて開催されることが紹介されました。

大会二日目には、シンポジウム「暑熱環境への適応」を開催し、主として、長期暑熱順化に関する最新の知見が紹介されました。

大会の運営にあたっては、デザイン人間科学部門の教員だけでなく、福岡周辺の大学教員に参加いただきました。また多くの学生に、大会スタッフとして協力してもらいました。大会長として、皆さまに御礼申し上げます。



Taylor 教授



シンポジウム 1



シンポジウム 2



懇親会での 1 コマ



口頭発表会場



ポスター発表

【大会のお知らせ】

第 65 回大会(大阪)のご案内 (第 2 報)

大会長 小谷賢太郎

関西大学システム理工学部

第 65 回大会を、下記の会期・会場で開催いたします。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

本大会では例年通り特別講演、一般公演、ポスターセッションと合わせて、今回初めて人類働態学会との合同シンポジウムを企画いたしました。

「高齢者の運動機能と日常生活」をテーマに両学会からの研究者の方に登壇いただき、生理人類学、人類働態学の二つの視点から、加齢をテーマに活発な議論をいただこうと考えております。また、特別講演は藍野大学教授・外池光雄先生に「マルチモーダル五感機能計測研究の現状と展望」と題して、ヒトの五感機能計測の最先端の話題をいただくことになりました。詳細につきましては、学会ホームページなどで随時お知らせする予定です。たくさんの方の皆さまと関西大学のキャンパスでお目にかかれることを心より楽しみにしております。ぜひ、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

1) 会 期：2011 年 11 月 26 日(土)～27 日(日)

2) 会 場：関西大学 100 周年記念会館

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

(阪急千里線関大前駅より徒歩 5 分)

※地図等は学会ホームページでご確認ください

3) プログラム概要(予定)

○理事会・若手の会(11/25)

○一般口演(11/26・27)

○ポスターセッション(11/26・27)

※ポスター発表については A0(1189mm × 841mm) 縦長のサイズでパネルをアレンジしています。

○シンポジウム(11/26)

○特別講演(11/26)

○評議員会(11/26)

○懇親会(11/26)

○総会(11/27)

■特別講演 11 月 26 日(土)

論題「マルチモーダル五感機能計測研究の現状と展望」

外池光雄(藍野大学医療保健学部)

司会：小谷賢太郎(関西大学システム理工学部)

■日本生理人類学会－人類働態学会第 1 回合同シンポジウム 11 月 26 日(土)

テーマ「高齢者の運動機能と日常生活」

総合司会：宮崎良文(千葉大学)、酒井一博(労働科学研究所)

演者：前田享史(北海道大学)「体温調節機能－成長と加齢－」

青柳 潔(長崎大学)「高齢者の運動機能と転倒・骨折」

植竹照雄(東京農工大学)「高齢者の自転車運転」

堀野定雄(神奈川大学)「長寿社会の交通安全」

4) 参加・発表申し込み等日程・方法

○演題申込締切：2011 年 9 月 26 日(月)

○抄録提出締切：2011 年 10 月 21 日(金)

※参加申込、発表申込の詳細(申込フォームなどの書式など)を学会ホームページ www.jspa.net に掲載いたしますので、ご確認をお願いします。

5) 大会参加費・懇親会費

■大会参加費

・10 月 21 日(金) 以前

正会員 6,000 円、非会員 9,000 円

学生(正員/学生会員)2,000 円、学生(非員)3,000 円

・10 月 22 日(土) 以後

正会員 7,000 円、非会員 9,000 円

学生(正員/学生会員)3,000 円、学生(非員)4,000 円

■懇親会費

正会員 4,000 円、非会員 5,000 円

学生(正員/学生会員/非員)2,000 円

■振込先(郵便振替)：日本生理人類学会第 65 回大会事務局 00970-3-163985

6) 大会事務局(問合せ先)

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

関西大学システム理工学部機械工学科人間工学研究室内

日本生理人類学会第 65 回大会事務局

E-mail: jspa65@kandai.ne.jp

Tel: 06-6368-1121 (内)5623 Fax: 06-6388-8785



【学会各賞受賞者の言葉】

学会賞受賞のご挨拶

横山真太郎

(北海道大学工学研究院環境人間工学研究室)



「この度は因らずも名誉ある学会賞を賜り、大変光栄に存じます。」と6月の総会での受賞の挨拶の原稿には記載されました。受賞理由を説明した選考委員長が小生の研究室の准教授で、賞状

と記念品を授与する会長が小生の同級生という極めて特殊な状況に立たされ、準備原稿を全て破棄し、アドリブで挨拶したため、一部の方には好ましくない印象をいだかれたのではと、反省しております。

今回の受賞理由には、「特に第7回大会および第60回大会の大会長」等があげられております。思い起せば、生理人類学会との関わりは、新潟大学での1978年11月8日の生理人類学懇話会の設立の際の適切な研究成果口演をしたことが最初でしょうか。余り知られていない貢献としては、1978年12月のインドでの第10回ICAES(国際人類学・民族学連合大会)にて、単独で、Prof. Paul Baker (Pennsylvania State University)をはじめとするPhysiological Anthropologistに研究紹介をしたことです。関連して、1983年8月のカナダでの第11回ICAESでは、吉田敬一先生をはじめ多くの学会員(正確には生理人類学研究会会員)と国際交流に努力しました。

そうこうしているうちに、北海道大学工学部所属の小生の周辺から、ICAES(国際人類学・民族学連合大会)に代表される工学と距離があるような領域に頻繁に出張するのは、……、ということが聞こえてくるようになりました。そのような中、1993年の第31回大会開催のためのお膳立ては、当事者としては、ある種の相当な覚悟の上でのことでした、と今だからいえます。

その後のある時期から状況が変わり、われわれの環境人間工学研究室を中心とした工学研究院はもとより井上馨教授をはじめとする保健科学研究院の先生方、高等教育機能開発総合センター、地球環境科学研究院、教育学研究院、情報科学研究科の先生方とも生理人類学について連携できる体制が北海道大学内で充実しつつあります。井上馨

先生との第51回大会(2004年)や第60回大会(2009年)を開催出来たのはその現れと考えております。

結びに、6月の総会での受賞の挨拶の未発表原稿をそのまま再録してお礼の言葉とさせていただきます。

「この度は因らずも名誉ある学会賞を賜り、大変光栄に存じます。ご推挙いただきました会員の皆様に心よりお礼申し上げます。今後はこれを機に、特に、次世代の研究者の方々のために、出来る範囲で精一杯努力していく所存です。宜しく願い申し上げます。重ねて、今回の受賞に対して、心からのお礼を申し上げます。ありがとうございます。」

優秀論文賞受賞に寄せて

藤原勝夫

(金沢大学医薬保健研究域医学系)



この度は、Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY 29巻6号に掲載された私ども(Katsuo Fujiwara, Hitoshi Asai, Naoe Kiyota and Aida Mammadova)の論文

"Relationship between Quiet Standing Position and Perceptibility of Standing Position in the Anteroposterior Direction" に対し、平成22年度日本生理人類学会優秀論文賞の栄誉をいただき、光栄に存じます。私ども以外にも、この種の研究に携わっている方々に、大いなる研究意欲を下さったと、感謝いたしております。

今回受賞した論文では、立位位置の再現法を用いて、位置知覚能を評価しました。安静立位位置に近いところでは、個体間に共通して位置知覚能が最も低かった。ただし、安静立位位置が30%近くに位置している人では、知覚能の低い位置は安静立位よりも若干前方に位置していた。一方、踵から足長の20~30%および70~80%では、安静立位位置に関係なく、高い知覚能を示した。これらの結果から、感覚参照系を介して、生体にとっての転倒の危険性や安定性などの意味づけをしており、それが位置知覚能を大きく左右していると推察した。この研究の動機になったのは、(1)安静立位の前後足圧中心位置は、成人では個体差

が大きく、足長の30～60%の広い範囲に分布している、(2)座位から立位姿勢を繰り返し保持すると、その位置が足長の約13%と比較的広い範囲に分布しているという知見であった。このことから、安静立位位置の知覚能は他の前後位置に比べて低いのではないかと考え、本研究を実施した。

この研究を通じて、感覚弁別能の理論であるWeber-Fechnerの法則では、この位置知覚の特徴が説明できないと考えるようになった。そして、立位位置によっては、感覚情報が急変し、それが重要な位置情報となりうるとの仮説を持つようになった。また、用いる感覚情報に大きな個人差が存在していると考えようになった。それが、生活の中で適応している運動や作業姿勢の影響を強く受けているようだ。このようなことを明らかにすべく、現在、各種の感覚刺激を用い、姿勢動揺、感覚誘発脳電位および局所脳血流量を測定している。加えて、個人の安静立位位置を規定している要因の解明に、強い関心を持っている。

最後になりましたが、この研究を支えてくれた研究室関係者に感謝の意を表します。また、日本生理人類学会のますますのご繁栄と会員皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

論文奨励賞を受賞して

津村有紀

純真短期大学食物栄養学科



この度は、平成22年度奨励賞をいただき誠にありがとうございます。思いがけずこのような栄えある賞をいただきましたことを大変嬉しく光栄に思っております。今後はこの賞を励みに、またこの賞に恥じぬよう、より一層身を引き締めて研究に邁進していく所存です。

今回受賞しました論文 "Seasonal Variation in Amount of Unabsorbed Dietary Carbohydrate from the Intestine after Breakfast in Young Female Thai Subjects: Comparison with that of Japanese Subjects" ではタイにおける糖質の消化吸収の季節変動を検討しました。われわれはこれまでに、日本において糖質の消化吸収の季節変動を検証し、糖質の非消化吸収率は秋にもっとも低く、冬にもっとも高いことを明らかにしてきました。さらに温度変化

の顕著な四季を有するポーランドにおいても日本と同様な糖質の消化吸収の季節変動が見られたことから、この糖質吸収の季節性は環境変化に適応した人類の概年リズムの一つではないかと考察しました。しかし、環境の季節変化が少ない地域において糖質の消化吸収に季節性が存在するのかは明らかではなく、今回の研究では暑季、雨季、乾季での気温変化の少ない熱帯タイ(チェンマイ市)において糖質の消化吸収を測定し、これまでに明らかとなった日本での糖質の消化吸収の季節変動と比較しました。その結果、年間を通して環境の季節変動が少ないタイでは糖質の消化吸収に季節変動が存在しないことが明らかとなりました。また、朝食に含まれる糖質の口盲腸通過時間については日本においてもタイにおいても季節性はみられませんでした。これらのことから、日本とポーランドでみられた糖質の消化吸収の季節変動は地域環境の季節変化に適応したものであり、胃腸の運動以外の消化吸収能に季節変動が存在すると推察されます。

今回、このような栄誉ある賞をいただきましたのは、熱心にご指導を賜りました曾根良昭教授をはじめとする先生方、研究を実施・支援いただきましたスタッフや協力者の皆さまのお陰です。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、日本生理人類学会のますますのご繁栄と学会員皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。



【授賞報告】

第64回大会優秀発表奨励賞の審査結果報告

第64回大会長 析原 裕
九州大学大学院芸術工学研究院

厳正な審査の結果、以下の方々の受賞が決定しました。授賞式は第65回大会(2011年11月、於・関西大学)の懇親会で行います。受賞者の皆さま、おめでとうございます。

■優秀発表奨励賞

- ・ 疋田あかり氏(東京家政大学大学院)
「胃腸図と心拍変動性よりみた自律神経機能の関連性」
- ・ 虎本紗代氏(九州大学大学院)
「熱帯地出生者の皮膚温度感受性に関する研究」
- ・ 中塚悟志氏(九州大学大学院)
「異なる色の光を網膜上に部位照射したときの瞳孔反応」

【研究部会レポート】

Wood Human/Relations 研究部会 第19回講演会 「見える木、魅せる木～木の内装と人の関わり」

小林大介 (横浜国立大学教育人間科学部)

2011年3月17日、Wood Human/Relations 研究部会第19回「見える木、魅せる木～木の内装と人の関わり」が京都大学農学研究科にて行われた。今回の講演会は、当研究部会、日本木材学会居住性研究会、日本木材加工技術協会木質仕上げ部会による共催で、3月18日から20日にかけて開催された第61回日本木材学会大会に合わせて開催された。3月11日に発生した東北地方太平洋地震の影響により、今回の講演会は開催すら危ぶまれ、開催しても参加者が集まるのか懸念された中、当日の飛び入り10名以上も含め最終的には約40名の参加をいただいた。

昨年10月に公共建築物への木材利用を促進する法律が施行され、今後様々な建築物への木材利用が加速するであろう中で、この状況を Wood Human/Relations の観点から鑑みると、木材利用が量的な発想だけになってしまい、住まう人の感性にあった木材の使い方がおざなりにされるのではないかと懸念された。そこで今回の講演会は、住宅内装における木材の多少やデザイン、「木の見え方、見せ方」がヒトに与える影響について、最近の知見をワークショップ形式で参加者の皆さんと共有することを主旨に開催された。

最初の演目は、京都で開催する講演会ということで、「京都の木で建てる長期優良住宅」を手掛ける南宗和氏に、「京都の木で建てる・京都の木で魅せる」というテーマで講演いただいた。南氏は株式会社「里仁舎」の代表をされており、京都市内で木造住宅の設計・建築を行っている建築家である。「木の魅せ方」について、数寄屋建築などの歴史的様式による木の魅せ方、地域材利用住宅での木の魅せ方、京都の木で建てた住宅における木の魅せ方、北山杉を素材とした建築物・家具などをご紹介いただいた。「節は天井や床よりも壁で気になる」、「木の使い方も重要だが木と周りとのコントラストも大事」、「要素数を増やすとうるさくなる」、「木だけは暑苦しい」など木質内装についての建築家としての経験や知見に裏打ちされた話題は、参加者の興味を引いた。その他にも木造住宅や地域材利用住宅の歴史に関する資料は目を見張るものがあり、時間が許せばもう少し聞きたかったというのが正直なところであった。

次に「木質空間はストレス軽減に寄与するか」という題で筆者が講演を行った。ここ数年行ってきた木造



校舎、鉄筋コンクリート造木質内装化校舎と鉄筋コンクリート造(RC造)校舎内でのストレス反応測定について紹介し、教室に滞在する被験者(大学生)のストレス値を比較した結果、木質内装化教室でのストレス値のほうが、非木質内装化教室にくらべて有意に低いことを報告した。

続いて「内装の木材量とデザインの差異がヒトに与える影響」と題し、森林総合研究所の恒次祐子氏が講演を行う予定であった。しかし、震災の影響で登壇かなわず、京都大学の仲村匡司氏が、恒次氏より事前に受け取ったプレゼンテーションデータをもとに内容を紹介した。木材率が30、45、90%の部屋を用いた実験では、45%の部屋が最も快適と感じられ、脈拍数、脳活動も主観評価の結果を反映した。また、柱・梁などを配したデザイン性の高い部屋は、木材率30%の標準的な部屋に比べて、主観評価に差異は見られなかったが、脈拍数が増加する傾向が見られることが紹介された。また機会があれば、最新の知見も含めてご本人から紹介いただけたらと思う。

最後に京都大学の仲村氏が、「木材の誘目性：木が目立つことはいいことか」という題で、講演と視線追跡の実演を行った。アイマークレコーダを用いて、木目模様を見たとき、有節材を見たとき、実大木質内装空間を見たときの被験者の視線を追跡したときの特徴が紹介された。木材が一切存在しない空間では、視線が中央に集中するのに対し、長押や柱といった軸材を配すると、視線は軸材に沿って動く。また柱材を450mmと狭い間隔で配すると、視線は柱に沿うのではなく柱から柱へホッピングするケースが多いことが紹介された。アイマークレコーダによる測定実演では、参加者の中から被験者を募り大型ディスプレイに映し出される映像を観察させ、実際に木目模様や木質内装空間の画像を見たときにどのように視線が動くのかを体感

していただいた。

本研究部会では、今後も最新の知見を共有できるような講演会や測定機器を使つての実演会、見学会などを考えております。今後の本部会の開催案内等を受けたい方は、以下の部会幹事：

小林大介(横浜国大, kobadai @ ynu.ac.jp)

森川 岳氏(森林総研, tmorik @ ffpri.affrc.go.jp)

まで、また、第19回講演会の資料をご希望の方は、仲村匡司氏(京都大学, nakamasa @ kais.kyoto-u.ac.jp)まで、ご連絡ください。

from Editors

次回 No.5 の原稿締切は 2011 年 9 月 1 日です

▽今号より、PANews の編集を行う担当理事が交代いたしました。この場を借りてご挨拶申し上げます。

- ・今号から仲村先生(京都大)と PANews の編集を担当することになりました安陪大治郎です。仲村先生とは実家が近所で、子どもの頃に仲村先生の弟さんと一緒に遊んでいたことがあります。同じ福岡高校の先輩でもあります。

さて、PANews は ISSN ナンバーを持つ会報です。分かりやすく言うと学術雑誌としての扱いができる会報であるということです。様々な企画を予定しておりますが、書き方によっては

若い研究者の研究業績の蓄積に貢献することが出来るかもしれません。仲村先生にリードして頂きながら、up to date な情報を学会会員の皆様にお届けしていきたいと思ひます。

- ・会報担当理事を拝命した仲村匡司です。PANews の編集を担当するのは5年ぶりです。会報担当のお役目は、PANews の円滑な発行に尽きます。会員のみなさまの興味をひく記事を遅滞なくお届けできるよう努力する所存ですので、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。
- ▽関係学会の研究動向、留学先の様子、生理人類学関連書籍の書評などなど、みなさまからの投稿をお待ちしております。約900字で半ページとなります。ビジュアルに訴えるカラーの図版や写真も大歓迎です。紙版はモノクロ掲載ですが、学会ホームページで公開されるPDF版ではカラーのまま掲載されます。なお、記事の掲載可否は PANews 編集事務局で決定いたしますので、あらかじめご了承ください。

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス panews@jspa.net
※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。

